

TS（トータル・サティスファクション）を目指して M24

カンニングゼロを実現した方法

校長室担当より

これは神戸大学計算社会科学研究センター特命教授の西村和雄先生、同志社大学経済学部教授のハ木匡先生が執筆された「学力と幸福の経済学」（日本経済新聞出版）からの引用です。これを読んでみてください。とても考えさせられます。

アメリカの大学で面白い体験をした。経済学部が提供するミクロ経済学を、工学部の生徒に教えていた時のことである。そのクラスは多人数の留学生からなるクラスであった。当時はカンニングをする学生が多く、期末試験では1枚ごとに異なる問題のセットを配って、斜め前の答案を見ても正解が得られないような対応をする教員もいるほどであった。こちらがいくら頭をひねって工夫しても、カンニング行為そのものを減らすことにはならなかった。そこで私は学期の最初の授業で、「カンニングをした答案であることがわかったら、どうするか？」と黒板に書いて学生たちの反応を見てみた。すると、全員が「不可にする」と答えたのである。私は小テスト、中間試験を問わず、毎回同じ質問をしてから試験を行うようにした。すると例年カンニングが非常に多いことで知られていたクラスでも、私の行った期末試験でカンニングをしたものは出なかった。

これは本当に興味深い話ですね。この著者によると、ルールというと「してはいけないこと」を明示して、やった場合には罰を与えるもののように思いがちですが、「してはいけないこと」と共に、それを破った場合の適切な対応を事前に明示しておくことが必要とのこと。こうすることで「してはいけないこと」も絶対にしてはいけないことではなく、するかしないかは生徒自身が考えた上での選択となるのです。ここに自己決定の機会が生まれ、規範意識に向けた内発的な動機がもたらされる。さらに言うと、ルールは罰を与えるものではなく、「してはいけないこと」をすれば、その対応を受け入れるという自己決定の余地を残した「約束」になるのです。そのために、私たち大人が家庭でも学校でも、子どもたちへ「ルール」の明示だけに終わらず、事前の「約束」の場面を「前さばき」としてもっと意識していきましょう。（令和7年9月19日）